

# IAMAS 図書館便り

IAMAS [イアマス] とは、情報科学芸術大学院大学の英語表記の頭文字を取った略称です。



特集 フリースタイルの継承 久松真一図書資料展

- 司書のおススメ！（2）

## 特集 フリースタイルの継承 久松真一図書資料展

2024年1月24日から3月1日まで、本学附属図書館の展示スペースにて、「フリースタイルの継承 久松真一図書資料展」を開催しています。

### メディア表現として記録された記憶 松井茂（図書館長）

情報科学芸術大学院大学付属図書館とArt of Listening プロジェクトの企画で、岐阜県にゆかりのある哲学者、久松真一(1889~1980年)を主題にした展覧会を開催します。久松は、西田幾多郎に学び、京都大学や京都市立芸術大学で教鞭を執った人物です。その思想に対する注目は、禅の研究を通じて世界的に高まっています。またリレーショナル・アートの作家リー・ミンウェイが、森美術館で開催した個展に、久松による書「白隠の隻手の声は耳もなく手も無く舌もなくてこそきけ」を展示しました。

本展では、岐阜県図書館と付属図書館が所蔵する図書資料を活かすと共に、久松真一記念館(岐阜市長良)との対話を通じて、日常に継承されるその思想に注目します。言い換えれば、学説的な検証に留まらず、むしろ岐阜市長良の旧家、旧宅の生活誌という性格から、久松家を主題としたということもできます。その理由として、久松真一記念館に漂うリラックスした雰囲気と惹かれるところが大きくありました。真一を哲学者として評価する一方、他方では生活者としての佇まいを継承している。そのように意識させる要因は、記念館館長である久松定昭氏の生活者としての感覚に基づく。旧家を継承し、旧宅を維持するその方針は、真一の生きた時間の凍結でなく、むしろ現在への溶解として見出されている。この生活感覚の流動性こそが、真一の思想の継承であり、リアリゼーションに他ならないのです。このことは、真一が道場の名前にも用いた「FAS」、すなわち「Formless self/形なき自己」「All mankind/全人類」「Superhistorical history/歴史を越えた歴史」に通じるのです。真一の哲学に基づく記念館の姿を、本展では「フリースタイルの継承」と題しました。これを以下の5つの部分から構成しています。

- 1 図書資料26冊(渡辺基尚司書)。
- 2 久松定昭氏へのインタビュー。
- 3 Facebookに氏が公開した抱石庵日記(41篇)。
- 4 記念館との対話に取り組んだ、雨宮由夏(博士前期課程1年)による、真一の記録、定昭の記憶を再演し、継承(改変)したインスタレーション。
- 5 富田太基(デザイナー)による会場構成。

尚、本展のタイトルとした「フリースタイルの継承」は、記念館のリサーチの際、内装の扱いに対して、富田がふと漏らした「フリースタイルだなー」という発言を活かしたものです。

## 並走するモノがたり 雨宮由夏(博士前期課程1年)

久松真一記念館のツアーに参加したことがきっかけで、記念館の器について関心をもった。きちんと手入れされた沢山の器やものが、著名人によるものも素人に作られたものも関係なく展示されていた。そのような展示品について久松定昭さんにおききすると、「これはね」とひとつひとつお話しして下さる。「すごい!全て把握されてるんだ」と思った。しかし、実際には跡取りの定昭さんでもいつからあり、誰がどのように使用していたのかなどがわからないものも多く、今も本を読んで調べたり、茶道を習ったり、母屋や蔵の整理しながら、記念館にある器やものとの距離を縮めていた。「そうだよな」とその時思った。代々続く家では、自分の知らないたくさんのもものと暮らしている。そういった暮らしの中で、真一さんを研究している定昭さん自身にも興味を持った。真一さんは家族の中でも一目置かれ、「おじいさま」と呼ばれていた。晩年は、岐阜の自宅(現在の記念館)に住む前に、京都の妙心寺の離れに住んでいた。その京都時代、好きが昂じて多くの器を制作した割烹「大吉」のご主人、杉本立夫さんとも交流があった。器が出来上がると真一さんによく渡していた。器の本『遊泥二人集』も自費で出版し、それも渡している。また京都市立芸術大学で教えていた真一さんはその時代、海外行脚でスイスやイランなどを訪れている。その時は、自身のお茶の器や茶器をいつも携えていたようだ。こういった器も記念館にある。記念館にはこういった真一さんのものがたくさんあるわけだが、実は定昭さんの所有するものもこっそり紛れている。例えば、シャチの写真やアンモナイト。これらは、海洋生物学者を目指していた定昭さんを物語る。小学生の頃、父親の転勤で西宮に引っ越した話など、定昭さんのエピソードも記念館のものに加わっていく。定昭さんから語られる真一さん、久松家の跡取りとして語る定昭さん、そして個人として語られる定昭さん。時間や立場を超えて行ったり来たりしながら混ぜこぜになっていく。

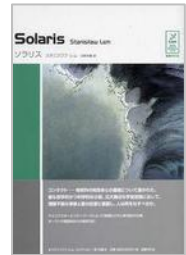
定昭さんから語られること、実際に使用されていた、使用されていたであろう器とモノとエピソード、書物、当時の写真...様々なナラティブが現在の光景となり、創造によって開かれた継ぎになっていく。暮らしの場で使っていた器やものが展示する場に関心を持った私は、ある時河井寛次郎記念館を訪ねた。その話を定昭さんにしたら「河井さんの器もうちにもあってね～」と新たなエピソードとなってかえってきた。

## 司書のオススメ！(2) 『スタニスワフ・レム コレクション』

スタニスワフ・レムというポーランドのSF作家をご存じでしょうか。アンドレイ・タルコフスキー監督のカンヌ受賞作『惑星ソラリス』(1972年)の原作者と言えば、IAMASでは通りがいいかも知れません。日本でも非常に評価が高く、近年になってからも作品集が刊行され続けている作家です。

代表作『ソラリス』(1961年)は、知性をもつ「海」がある惑星ソラリスに派遣された心理学者が、自殺したはずの恋人に出会うというもの。ソラリスの「海」が学者の記憶から恋人を再現したと推測されるが、その真意は最後まで明かされず、学者は苦しみ狂気の境まで追い込まれます。異星の人や生物との出会いはSFの王道ですが、友好どころか敵対すらできず、コミュニケーションもおぼつかない存在…真の異質さとはどんなものかを思い知らされる作品です。

他にも、サイバネティクスをとりあげた先駆けとされる『インヴィンシブル』(1964年)や、AIに軍拡競争を任せきりにした結果、兵器の進歩が分からなくなってパニックに陥るといふ『地球の平和』(1987年)など、現在でも色あせない作品が多くあります。日本での翻訳は、古くはロシア語からの重訳が主でしたが、この「コレクション」ではポーランド語から直接訳されているのも魅力のひとつです。



『ソラリス (スタニスワフ・レムコレクション)』  
(国書刊行会/2004年)



『インヴィンシブル (スタニスワフ・レムコレクション)』  
(国書刊行会/2021年)

### ◆情報科学芸術大学院大学附属図書館 利用案内

- 開館時間 月-木 10:15-19:00 / 金 11:15-20:00
- 休館日 土曜日・日曜日・祝日、年末年始、臨時休館日(蔵書点検など)
- 貸出  
学生 20冊・3週間以内  
卒業生 5冊(図書のみ)・2週間以内  
学外者 2冊(図書のみ/県内在住・在勤)・2週間以内